

# 英国オープン・ユニバーシティーの通信制大学院教育について

小川 哲生

本論文の趣旨は、英国オープン・ユニバーシティー（以下OUと記す）に於る大学院教育について、その内容・方法等を紹介し、今後の日本に於る通信制大学院教育開設の可能性を探ることにある。日本では、教育基本法第2条・第3条の趣旨及び当時の経済事情等を反映した昭和22年の学校教育法の制定により、その第54条によって学校教育の拡張手段として、通信教育による学習が正規の学校教育の一部として認められるようになった。大学通信教育について言えば、約50年を経た今日では、大学教育全体から見て重要な役割を担っており、社会的に不可欠なものとなっていると思われる。

大学通信教育は、戦後の発足当時から約30年間は、大学教育の機会に恵まれない勉学意欲ある青年に、学士取得の機会を提供することが主なる役割であったが、昭和50年代以降は、その役割は従来のものと質的に大きく変わってきている。即ち、すでに大学を卒業し、リカレント学習として大学教育を再受講するものが、約3分の1を占めており（これは放送大学でも同様である）、より多様なより高度の教育に対する要望の反映が、大学通信教育に顕著に現れている。また、高学歴社会及び高度情報社会の出現が、必然的に、より高い学歴や資格を求めるものを多数生み出す背景を作っている。

現在、日本には約15万人の大学院生がおり、この数は増加する一方であると思われる。この需要に対する供給は一面充分にあるが、しかし、大学院教育を受ける学生側のコストは大変重いものがある。学費もさることながら、時間的・場所的制約は極めて大きく、特に、勤労者が就業しながら大学院教育を受けることは、一部の夜間大学院（これでも場所的制約は大きい）を除くとその困難さは予想に難くない。このような背景から、通信制大学院の開設は一日でも早く望まれるが、昭和50年の大学基準協会による「大学通信教育基準の解説」以来今日に至るまで、「通信教育による大学院の設置は将来的課題」として、その実施が今日まで見送られたままになっている。その主なる理由については後述するが、大学院レベルの教育・研究を主に通信教育で行うことに積極的に取り組んでいる英国のOUの先験例を参考にすることは、日本に於る大学院教育の機会の拡張の実現に資することが少なからずあろうと思われる。

筆者は、1994年11月にOUを15年ぶりに訪問し、約20時間に亘ってOUの大学院担当教授や大学院管理スタッフから同大学の大学院教育全般について調査する機会を与えられた。そこで得た情報をもとに、本論でその概要を報告したいと思っている。

本論の構成は以下の通りである。

I OUの学部教育の概要

II OUの大学院教育の概況

### III 大学院教育の学習方法——MA 文学課程例

#### IV 日本に於る通信制大学院開設の問題点

##### I OUの学部教育の概要

OUの大学院教育について触れる前に、その基礎となった学部教育についてまず簡単に以下の通り紹介する。

(イ) OUの規模：OUは1969年に創立され、昨年創立25周年を迎えたばかりである。昨年度の在学者総数は約13万人おり、内訳は(a)学部学生約9万(b)ショート・コース生約2万(c)9ヶ月コース生約1.3万(d)大学院生約8千、の英国で最大規模の学生数を誇っている。現在では、全英国の大学卒業生数の約9%がOUの卒業生である。

大学のフルタイムの教職員総計は約3000名おり、内訳は、教授者800名、管理部門従事者500名、一般職員1200名、その他500名である。OUは、独立した通信制大学であるので、各地に散在する学生の学習支援のための地方学習センターを250ヶ所開設しており、そこで学習指導や学習相談等を行うパートタイムのチューターやカウンセラーの総数は7000名以上いる。

(ロ) 開設学科等：開設している学科(コース)は芸術・環境・数学と電算機・自然科学・社会科学・技術・外国語の7学科である。各々の学科は例えば芸術の場合、芸術一般・芸術史・古典研究・歴史・言語・文学・哲学・音楽・宗教の9コースがあり、更に、芸術一般コースは、1450-1600年の西洋の文化と信仰・1500-1800年の科学的西洋の勃興・啓蒙時代・1870-1950年の科学・技術及び日常生活等の小コースがあり、それらを入れると、開設コースは、卒業要件単位となる学部教育で136コース、資格の取得や教養等を目的とするその他のコースを含めると、全コースは250以上ある。コースは、一般教養的なものと極めて実用的なもの、例えば、CADやアナログ及びデジタル・エレクトロニクス等、学生及び社会的ニーズに合わせて多種多様である。OUの開設学科の特色の一つは、日本の大学のそれに比して、社会的実用性に適合したものが圧倒的に多く、同大学が社会的変化に素早く対応していることを示している。このことが、大学院教育の内容にも色濃く反映している。

(ハ) 学習の方法：OUに於る学科の学習方法は、日本の大学通信教育課程と同様に、在宅学習(distance learning)と面接授業(residential schooling)であるが、学習方法の大部分を占める前者はマルチメディア型パッケージによる学習である。即ち、印刷教材とBBCラジオやテレビ、あるいはオーディオやビデオ・カセットテープと一体教材となっており、コースにより「自宅実験キット」やコンピュータソフトウェアと一体教材になっているものもある。面接授業は、卒業希望の学部生の場合、約一週間の夏期面接授業の出席を義務づけられるが、近くのOUと提携している大学に於て授業を受けることになる。

通信教育の最大の問題は、自学型学習固有の問題である学習の孤独感からくるドロップ・アウトである。この問題の解決策として、OUは英国全土に250の地方学習センターを持ち、そこに全ての学生を登録させ、各センター所属のチューターあるいはカウンセラーと常時連絡をとれる態勢を整えている。その結果、日本の大学通信教育課程の卒業率は約10%に対し、OUのそれは55%である。

(ニ) 入学と卒業：入学資格は、高等学校卒業等の資格は一切無く、18歳以上の成人であることが唯一の入学資格である。卒業に要する単位は、英国のほとんどの大学が採用して

いるCATS（注）に換算すると360ポイント（以下ptと記す）であるが、年9ヶ月の学習で120pt修得可能になっている。それ故、最短の場合、3年で卒業可能である。通常1コースは、9ヶ月の学習期間を設けており、120pt修得するためには、1週につき約12-14時間の学習が要求されている。単位は、通常、レポート課題の提出と科目試験の組合せによって修得することになる。試験採点の基準は、OU以外の大学教員の審査を適宜受け、OUの認定した単位が、英国の他大学と同一水準を保つようにしている。

(イ) OUの学生像：OUの学生は、18歳から90歳までおり、中心は30歳代である。半数は女性で、英国の他の大学に比して最も女性の在学率の多い大学である。学生の父親の職業階級は、約半数が「ブルー・カラー」であり、（父親をブルー・カラーに持つ大学生は、他の英国大学では、一般的に、5分の1以下である）更に、身体等の障害者をもOUは積極的に入学させており、現在では約4500名が入学している。以上の特色を持つOUの教育理念は以下の通りである。

(ホ) OUの教育理念と使命：

①人々に開かれた大学であり、大量且つ多様な学生に奉仕することによって、大多数の人々が高等教育を目指す時代に、指導的役割を果たせるようにする。

②大学と云う場所を人々に開き、英国全土更にはヨーロッパや世界の全ての場所にいる人々のために、コースや教育計画を開発し、それを奉仕し、教育の機会を拡大することに貢献する。

③教育の方法を開かれたものとするため、自宅及び職場にいる人々に、遠隔教育の方法や学習のための新しいテクノロジー及び教育技術を活用する。

④アイデアを開き、知識を拡大させ、精緻なものとし、且つそれを分かち与えていくことによって、生々とした学問の世界を作りあげる。

## II OUの大学院教育の概況

現在OUには、教育学、文学のMA課程と教育・社会研究法、数学、商業・工業技術用電算利用、経営と技術のMSc課程、及びMBAの大学院課程があり、更にPhD課程もある。前者は、Taught Master's Degreeであり後者はResearch Degreeである。前者は、日本ではあまりなじみのない学位であるが、米国では一般的であり、職業に直結したいわゆる「専門修士」である。修士課程は、1985年に始まり、2年後の1987年には約700名の学生が在籍し、現在では8000名を越える世界最大規模の大学院課程である。Research Degree課程でさえ、現在の在籍者数は750名を越えている。

MA文学課程委員会代表のS・エリオット教授の話によれば、MA文学課程開設に対する学生側の要求は、学部開設後最初の卒業生を出した頃からあり、修士課程開設へ向けてその可能性の調査・実験を約10年行い、1985年に開設したとのことである。開設へ向けての調査・実験の主な項目は、大学院教育にふさわしい研究法や論文作成方法の修得可能性を探ることであり、通信教育による自学に適した研究方法の開発であった。大学院教育に求められる、学習者各自が各々の研究法を修得し、それに基づき「研究」に値する論文やその他の成果を得ることが通信制でも充分に可能と判断した結果、MA課程を開設したとのことだ。

入学資格は、MA文学課程では現在のところ学士取得者に限っており、毎年約200名の応

募に対し、許可数は80名で、同課程の委員会で入学許可の判定を行っている。開設後10年で約400名の MA を輩出し、学位取得率は約50%である。同課程の委員会は、1997年迄に歴史学・文化学・芸術学・古典学・図書史学等の開設に向けて準備中とのことだ。

MA 文学課程では、教育内容は伝統的な大学院課程と同様であるが、他の大学院課程のほとんどは、学部教育同様に極めて実用的内容を持ったものである。MBA 課程の場合、例えば The Competent Manager コースは、労務管理・財務管理・市場調査・為替管理・情報管理・競争力強化等のコースで構成されており、企業社会の需要に対応した教科内容で構成されている。同課程のコース主任教授である K・ウィリアム氏の話によれば、在籍者の9割が現業に就いている、いわゆる On the job training として学習しているとのことだ。入学動機の内8割は、MBA を取得することによって企業内での昇進を目指しており、また、学費等企業からの支援を受けて入学する学生は非常に多いとのことだ。同課程は1985年から開設され、年約250名の学生を入学許可しており、文学同様学位取得率は約5割である。同課程は、1992年以降、EU 全域から入学者を迎えており、ベルリンの壁崩壊後、特にチェコ・スロバキア・ロシア等東欧の市場経済化へ向けてその人材を養成する役割を担うようにもなっている。OU は MA・MBA・M Sc の正規の大学院課程以外に、その教育水準に準じる多くの Diploma 課程を開設している。健康及び社会福祉上級 Diploma, 教育管理・数学教育等の上級 Diploma, 経営管理と技術の上級 Diploma 等各種の Diploma コースがあり、これらの Diploma コースで修得した単位の一部は、MA・MBA 等の課程入学の際、認定換算されるようになっている。この様に、OU の大学院教育は、社会の諸要求や変化に対応すべき、多種多様な大学院教育を行っており、それは、西欧の固陋な階級社会を打破するに不可欠な「学歴主義社会」「資格主義社会」の実現要求とその社会の実現へ向けて中心的役割を果たしているかのようである。

前述のように、OU の使命の一つは、大学を通信教育という学習手段をもってその開放を行っているだけでなく、教育の内容も社会の需要や個人の自己実現に供するようにすることである。それ故、個人及び社会の要求に常に応えるため、開設コースの内容は、伝統的な大学のそれより实际的・実用的であり、また、その内容は高度の専門性を持ったものである。紙面の制限上ここでは筆者の専門領域である教育学の MA 課程を例にして、以下その一端に触れてみる。

#### (1) MA 課程開設コース

- |             |                        |
|-------------|------------------------|
| ・授業研究       | ・教育調査                  |
| ・論文         | ・社会状況下の言語と識字           |
| ・教育、訓練及び雇用  | ・教育における性差の問題（平等と差異）    |
| ・教育管理       | ・教育管理の実際               |
| ・教育課程、学習と評価 | ・教育課程の発展（教育における平等と多様性） |
| ・社会状況下の児童発達 | ・新任教師の研修               |
| ・科学教育       | ・初等教育（コア・カリキュラム）       |
| ・テクノロジー教育   | ・学校管理理解                |

以上が現在開設している MA 課程のコースであるが、既述の様に、上級 Diploma 取得のための教育系の2専攻課程があり、MA 課程入学者の多くは、専攻課程を修了している。専攻課程に入学するためには、学部を卒業していなければならないが、開かれた入学制度を原則としている OU は、当然、入学志願者のその領域に於る職業的実績や経歴等を勘案

して、学卒以外の入学志願者をも受け入れている。専攻課程の開設科目は、極めて教育現場に直結しているものが多く、例えば、上級 Diploma 課程では「教育管理」「数学教育の応用研究」「教育に於る特別需要」のコースが開設されており、「教育管理」コースの内容は、校長等の学校管理者や教育委員会職員の仕事の改善に直結している。専攻科で取得した単位の内のいくつかは、MA 課程入学の際認定換算される。MA 課程開設コースの各々については、入学案内にその内容が詳細に説明されており、同時に各コースが現職教員向けあるいは学校管理者向け等の説明もされている。この様に、開設されているコースのほとんどは、教育に従事しているものがより高度な専門性を獲得出来る様、現場の要求に応えるべく編成されている。OU 訪問の際、丁度、教育学 MA 課程の学部長である R・グライスター教授の MA 向け教材のコースチーム会議に参観の機会を与えられたが、チームの構成員約10名は、教育現場からの諸要求に如何に答えるべきか白熱した議論を行っていた。

### III 大学院教育の学習方法 —— MA 文学課程例

(1) 学習方法の概要：OU の大学課程に於る学習の方法は、基本的に学部教育と同一である。マルチメディア型・パッケージの自学用教材による在宅学習と、各地にある地方学習センターでのチューターからの直接指導及び年1回1週間程度の近在の大学に於る講義の受講である。しかし、大学院に於る学習は、学部のそれと比して、「教育を受ける」ことより自ら「研究」することが主となるので、教材は学部と異なることが多い。即ち、学部課程に於ては、あるコースを修得するに要する各種教材は、OU から送られてくる教材でほぼ完結するが、大学院の場合は、学習者自ら研究に要する教材を図書館等で探し求める事の方が多くなる。大学院課程のコースの中には、少数だが、200ページ程度の印刷教材が約10冊とそれに付随するオーディオあるいはビデオ・テープが一体となったパッケージ型ユニットを使って、それだけでほぼコースの学習が完了できるようになっているものもあるが、大部分のコースは、各自が文献・資料を収集し学習を行うようになっている。次項の、MA 文学課程で説明するが、OU から送られてくる自学用の教材のほとんどは、いわゆる研究用「手引き書」的なものである。大学院教育管理スタッフの説明によれば、大学院課程の教材ユニットが学部と異なる理由として、大学院教育は、a)独立した研究者の養成という側面が重視されるので、各自が自ら文献・資料を収集することが要求されること b)大学院生の数が限定されているので、完結した印刷教材等を作成するにはコストがかかり過ぎること c)ケース・スタディを要求するコースが多いので、研究法を修得させるだけでよく、資料は各自が現場で収集すれば良い、等である。

配布される教材が上述の如くであれば、必然的に、大学院教育を進める上でチューターの役割は大きくなる。それ故、学部教育に比して、学生はチューターとの接触は多くなるとのことであった。

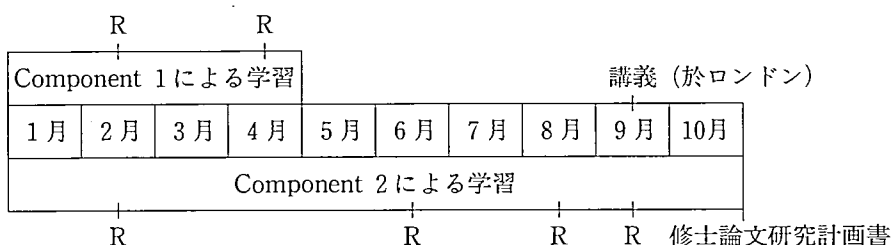
(2) MA 文学課程の研究プロセス：各 MA 課程には、大学院委員会と同機能の課程(専攻)委員会があり、同委員会が、大学院教育の教学上の最高管理機関となっている。同委員会は、代表者(主任教授)と10名程度の教学スタッフ及び計5名程度の編集者、デザイナー、コース・マネジャー等で構成されている。本稿では、MA 文学課程を例に、通信学習を主とする研究プロセスを見てみることにする。MA 文学課程では同委員会が編集した Core UNIT, Option UNIT 及び OU・IBIS が、学生向けの学習指導用教材である。各 UNIT

は120頁程度のものであり、そこには、学習計画案、レポート課題、参考文献一覧、研究方法の案内、文献収集の方法等、学生が研究を進めていく上で手助けとなるあらゆる情報が記されている。同 UNIT を参照しながら、各大学院コースに在籍した学生が、如何なる研究プロセスを経て学位の取得に到るか、以下概観する。

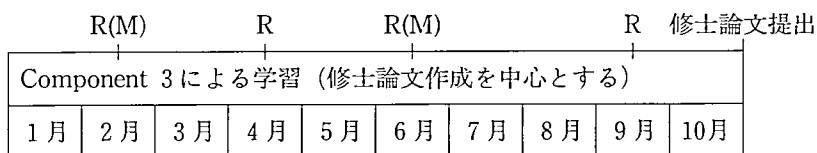
(3) MA 取得までの研究プロセス：MA 文学課程の場合、MA 取得までの年数は2年であり、毎年1月1日よりコースが始まり10月末日に1年のコースが修了するよう計画されている。学習時間は1週間14時間、年43週要求されている。2年間の学習期間の内、1年目は主に研究の基礎に関わるものを、2年目は主に論文作成に関するものを学習することになる。文学課程では、学位取得までの構成 (Component) を3つに分け、各々 Component 1, 2, 3とし、各 Component には、研究を行う上で要求される事項 (研究方法と図書館の利用法、文献収集と各版の比較法——例、サミエル・リチャードソンの「パメラ」を3つの版で比較すること、等) が記されている。また、Component には、「自己評価」項目や文献のチェック・リスト等があり、学生が独立して研究が出来るように、可能な限りの研究援助方法が記載されている。各 Component を終了するためには、レポート提出が義務づけられている。下図は MA 取得までの2年間のタイム・テーブルである。

#### MA 取得までの学習タイム・テーブル

##### 第1学年



##### 第2学年



(注) R はレポート提出, R(M)は課程委員会のモニターを要求されるレポート提出。修士論文提出後、12月中旬に口頭試問が行われる。

各レポートは、1500語程度のものが要求され、各 Component 終了の際には、1 では3000語、2 では5000語のレポート提出が要求されている。第1学年終了時には、修士論文の研究計画書となる小論文の提出を要求される。第2年次は、修士論文の作成年となり、その中途に4つのレポート提出が要求される。その内の2つは、課程委員会よりその内容をチェックされる。修士論文は、20,000語程度のものが要求され、論文提出後口頭試問を受けることになる。

レポートは、担当のチューターが添削するが、実物を見た限り添削は相当細部まで行わ

れており、コメントは詳細である。チューターによる添削の質の維持のため、委員会から恒常的にチェックを受けているとのことである。修士論文計画書及び修士論文は、担当のチューターのチェックを受け、課程委員会で審査を行い、MAの学位認定を行う。

面接指導は、学部課程に比してMA課程ではより重要な役割を果たさざるを得ない。それ故、チューターとの接触は第1学年度は計5時間、修士論文作成年の第2学年度には計10時間要求されている。接触の方法は、英国全土に13ある地域事務所の図書館で主として行われるが、電話による接触も一部認められている。研究上不可欠なdiscussionも、地域事務所に於て行われている。尚、研究上要する文献の大部分は、地域事務所の図書館に大体揃えられているとのことだ。大学院生担当のチューターは、OUでMAの学位を取得したものが多く、尚、課程委員会は、年1回ロンドンで同委員会の構成教授による講義を行っており、大学院生は必要と認めた場合、この講義を受けることが出来る。

以上の様に、自学用コース・ユニットと面接指導による学習過程を経てMAの教育が行われているが、研究上要する文献・資料の収集等には、OUが独自に開発したIBIS(Integrated Bibliographic Information System—OU・IBIS)をなるべく学生に活用させている。これによって、学生は極めて効率よく研究を進めることが可能となっている。OUはまた、現在、インターネットを利用した学習の開発に努力しているとのことだ。教授工学の研究・開発が進めば、将来は双方向性マルチメディアを利用した遠隔教育が中心となるように思われる。

以上、OUの主として通信教育を利用したMA課程を概観してきたが、OUのMAの質は他の大学のMAに全く遜色ないとの確信をOUの教授達は持っている。

#### IV 日本に於る通信制大学院開設の問題点

前述の様に、日本では現在に到るまで通信制大学院の設置は認可されておらず、文部省の各審議会でも「検討事項」のままとなっている。(財)大学基準協会が昭和61年に公示した『「大学通信教育基準」及びその解説』によれば、同基準の「備考」に「大学院(修士課程)通信教育基準は、別にこれを定める」とし、その「解説」として、通信制大学院の設置は「実施可能な専攻分野について、実施可能な必要条件の整備の下においてのみ、その開設が認められるべきである」とし、そのためには「教員組織の整備と教育指導能力の確保、施設設備の充実、面接授業の期間、放送授業の活用、在学年限等について格段の配慮が払われ、設置が講ぜられなければならない」としている。文部省大学審議会に於ては、昭和63年の「大学院制度の弾力化等について」の中間答申で、夜間大学院と並んで、通信制大学については「授業による教育に比重が高い修士課程については、これらを認める方向で検討を進める」と述べているが、平成2年の「部会から総会への報告書」では、夜間大学院についてだけが言及されている。平成3年の「大学院設置基準」改訂では、「教育方法の特例」として夜間大学院の設置のみ認められ、通信制大学院については、「検討事項」にさえ含まれないことになってしまった。その理由については、平成3年の大学審議会による「大学院整備充実について」の答申から以下のように窺うことが出来る。

(4) 高度な専門的知識・能力を持つ職業人の養成と再教育のため、大学院の果たす役割は大きい。また、人々が「文化的・知的に生活を充実し自己啓発を図るための学習の機会」を大学院に求めることは予想される。

(ロ) しかし、多くの日本の大学院は「学部とは独立した実体を具備するものが少なく」大学院として相応しい教員組織・予算・施設・設備を持っていない。

(ハ) それ故、既存の大学院の設備充実がまずもって重要であり、その上で、通信制大学院は初めて検討の対象となる。

以上の如くであると思われるが、この問題は、偏に大学院教育だけでなく、日本の多くの学部教育についてさえ言えることである。その理由や背景については各方面から探ることが可能であるが、その最大の理由の一つとして、日本の大学は社会的・個人的要求に充分応えてこなかった事をあげることが出来ると思う。近年の大学に対する各界からの各種の批判と提言に共通するものは、制度に安住し自己改革を怠ってきた私達教員を中心とする大学の閉鎖性についてである。この閉鎖性を打破し、自らを活性化していくためには、「開放制」教育の導入が不可欠であると思う。それは、単に教育手段を開放するに止まらず、教育内容の開放、即ち、教育課程を社会的・個人的要求に応じていく様に教授法の改善を含めて絶えず変革する必要がある。そのためには、学習意欲ある多種多様な年齢・職業・地域・社会的地位等の学生を大学に迎えることが何よりも効果的であると思われる。大学は自己の発展のためにも「開放」的教育が要求されており、それを学部教育の段階に止めるだけでなく、大学院教育にまで拡大すべきである。

大学をあらゆる面で開放することに最善の努力を払っていると思われる、OUの先験例は、生涯学習社会や高度情報化社会の出現に対応する大学の在り方の一つを示していると思う。

#### <注>

CATSは、Credit Accumulation and Transfer Schemeの略であり、米国の大学で使われ、日本でも戦後大学設置基準で使われるようになったカーネギー・ユニットと同様、大学に於る授業「単位」のことである。1 pointは7時間程度の学習時間を表す。

#### 引用・参考文献

- (1) The Open University : Studying with the Open University 1995/6
- (2) The Open University : Professional Development in Education 1995-1996
- (3) The Open University : Open Opportunities 1994/5
- (4) The Open University : M・B・A (Technology)
- (5) The Open University : MSc in Mathematics Prospectus
- (6) The Open University : The MA in Literature CORE UNIT,OPTION UNIT,OU-IBIS UNIT
- (7) オープン・ユニバーシティー発行の多くのFACT SHEETS